

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：23301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520114

研究課題名(和文)ドイツ語圏16、17世紀文献にみる西洋初期版画

研究課題名(英文)Early European Prints in German Literature from the 16th and the 17th Centuries

研究代表者

保井 亜弓 (YASUI, AYUMI)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：30275086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヨアヒム・フォン・ザントラルトの『ドイツのアカデミー』(1675)とそれ以前のドイツ語圏文献において初期版画がどのように記述されているかを検証するものである。ザントラルトは、ジョルジョ・ヴァザーリの『芸術家列伝』(1568)での版画論に反駁し、版画芸術の発明はイタリア人ではなくドイツ人によるものであると具体的に主張した。ドイツ語圏では、16、17世紀のヤーコプ・ヴィンフェリンク、ヨハネス・ブツハッハ、ヨハン・フィシャルト、マティアス・クアトによる文献においても初期版画について記されていることなどから、ドイツ人が自国の芸術としての版画に強い関心と誇りを持っていたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In his 'Teutsche Academie' (1675), Joachim von Sandrart disagreed with Giorgio Vasari's opinion that engraving, etching and woodcut were invented by the Italians. Sandrart was a defender of German art, but before him some German writers from the 16th and the 17th centuries also referred to early engravers, such as Irahel van Meckenem and the Monogrammists.

In this research I studied descriptions of early European prints in German literature. I investigated writings by Jacob Wimpfeling, Johannes Butzbach, Johann Fischart, Matthias Quad, and Sandrart. In addition to their works, I also studied collection catalogues of Basilius Amerbach and Paul Beheim. Through this research we discover that Germans in those years were proud of graphic art as their own art.

研究分野：西洋美術史、版画史

キーワード：版画 ドイツ ザントラルト ヴァザーリ

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、西洋の15~17世紀の版画について、従来の芸術性を重視する版画観とは異なり、版画が制作された当時どのように見られ、使われてきたのか、というその機能や受容に対する関心が高まっている。本研究はそのような研究動向の中に位置づけられる。

(2) 科学研究費助成研究「西洋近世版画史の一次資料調査」の研究分担者としてドイツ語圏の資料を調査する中で、ヨアヒム・フォン・ザントラルトの『ドイツのアカデミー』(1675)に版画にかんする独自の記述があり、さらにザントラルト以前にも初期版画についての言及が複数あることを認識したことが本研究の出発点である。

2. 研究の目的

(1) ザントラルトの『ドイツのアカデミー』とそれ以前のドイツ語圏文献において初期版画がどのように記述されているかを検証する。

(2) 初期版画についての記述を検討することによって、ドイツにおける版画芸術の意識あるいはドイツ美術における版画の重要性という興味深い問題を明らかにすることができる。

3. 研究の方法

(1) ザントラルトの『ドイツのアカデミー』および16、17世紀のヤーコプ・ヴィンフェリンク、ヨハネス・ブツハッハ、ヨハン・フィシャルト、マティアス・クアトによる書籍、さらにバシリウス・アマールバハとパウル・ベハイムの版画コレクション目録の記述における初期版画についての記述を、現存する作品の調査と共に検証した。

(2) ザントラルトの『ドイツのアカデミー』の該当箇所を日本語訳した。また、他の文献については随時日本語訳を行った。

4. 研究成果

(1) ザントラルトとヴァザーリの版画論の比較検討

ヨアヒム・フォン・ザントラルト Joachim von Sandrart は17世紀のもっとも著名なドイツ人画家、著述家であり、とりわけその『高貴なる建築、彫刻、絵画のドイツのアカデミー』*Teutsche Academie der Edlen Bau-Bild- und Mahlerey-Künste* (1675、79 以下『ドイツのアカデミー』と記す)で知られている。ザントラルトの著作は、ジョルジヨ・ヴァザーリ Giorgio Vasari の『芸術家列伝』*Le Vite* (1550、68) やカレル・ファン・マンデル Carel van Mander の『絵画の書』*Schilder-Boeck* (1604) をはじめとする先人の書物に多くを負っているとはいえ、版画にかんする記述は彼が自身の論を展開してい

る部分である。すなわちそれは、ヴァザーリの版画論に対する反駁である。

ヴァザーリは、『芸術家列伝』の第二版に加えられたマルカントニオ・ライモンディ Marcantonio Raimondi 伝では、他の伝記とは異なる形式をとり、冒頭から版画芸術の歴史を語っている。ザントラルトが問題としたのは、ヴァザーリがエングレーヴィング、エッチング、木版の発明をイタリア人のものとし、この芸術はイタリアからドイツに伝わったとしたことである。ザントラルトは、発明者の荣誉はドイツ人に帰すべきであり、ヴァザーリとは反対にドイツからイタリアに伝わったのだという主張を、具体的に例をあげながら行っている。

ザントラルトは、『ドイツのアカデミー』第一主要部(1675)において、彼がもっとも早い版画家と見做していたイスラエル・ファン・メッケネム Israhel van Mecknem の伝記で版画論を語り、ヴァザーリのライモンディ伝の場合と同様に、ほとんどその内容を版画論に費やしている。また、ザントラルトによるライモンディ伝の冒頭でも簡潔に同様の内容を述べている。これらのことから、形式という点においては、ザントラルトはヴァザーリに倣っているといえる。

とはいえ、「版画の起源」についての議論においては、ヴァザーリの主張は明らかに誤りであり、軍配はザントラルトに上がるであろう。また本研究において、とくに注目したいのは、ザントラルトがイスラエル・ファン・メッケネムの他にも数人の逸名のモノグラミストたちに言及し、ドイツでは早くから版画家たちが活躍していたことを強調している点である。このことは、ザントラルトの時代に初期の版画家が複数認識されていたことを示している。

(2) 16、17世紀ドイツ語圏文献における初期版画の検討 - 研究の範囲

はじめに研究対象を定めておかねばならない。初期版画という場合、通常アルブレヒト・デューラー Albrecht Dürer 以前を指し、そのもっとも重要な版画家はマルティン・ショーンガウワー Martin Schongauer である。実際ショーンガウワーについては、その作品は同時代から賞賛されており、多くの記述が残っている。しかしながら、ショーンガウワーにかんする記述は、すでにロター・シュミットの研究において明らかにされているため、ここではショーンガウワー以外の版画家を対象とする。具体的にはイスラエル・ファン・メッケネム、モノグラミスト、そしてザントラルトの版画論にも通じる版画史の記述という順で、16、17世紀の文献を検討する。

(3) イスラエル・ファン・メッケネム

イスラエル・ファン・メッケネムは、はじめてその名前を版画に記した版画家である。

15世紀の一枚刷り銅版画の現存作品数は、約3000点であり、そのうちイスラエル・ファン・メッケネムの現存作品は、500点を超え、推定される総作品数は800点以上にもなると考える研究者もいる。メッケネム以前では、はじめて版画にイニシアルを刻んだマイスターE.S.の現存作品が300点以上にのぼるものの、それらがほとんどユニカ、すなわち一枚の刷りしか残っていないのに対して、メッケネムの場合、マックス・レールスのカタログでは、100以上の刷りを数えている作品もあり、彼が工房を構えて大量に版画を制作販売していたことがわかる。彼の作品は広く出回っており、その名は後に文献で確認できるようによく知られていた。

彼の作品の多くが他の版画家の作品を模倣したものであることはよく知られており、「もっとも貪欲な海賊」と呼ばれることもある。しかしながら、アヒム・リーターは「イスラエル・ファン・メッケネム展」(2006)のカタログの論文において、メッケネムをたんに模倣者とするのも、また未だに19世紀的な価値観に照らして独自性を無理やり主張することも、正しくないと述べている。実際メッケネムが生きた時代に模倣は彼に限らず行われていたし、自身のモノグラムを刻むことも稀ではなかった。いわゆるコピーライトをはじめ主張したのは、よく知られているようにデューラーであり、彼の木版画「受難伝」連作をマルカントニオがエンブレヴィングで模倣したことを訴えたのだった。リーターは、メッケネムは独創性には乏しいが、「先天的に仲介者、販売者」であり、メディアを超えてさまざまな手本を用いてそれらを広く伝えたという彼の特殊な役割は、「1500年頃の北方の版画では歴史的に最も重要」であるとみている。

では文献において、どのようにメッケネムは記述されてきたのだろうか。ドイツ人の人文主義者、教育者であるヤーコプ・ヴィンフェリンク Jacob Wimpheling (1450-1528)による『現代に至るまでのドイツ王国略図』*Epithoma rerum Germanicar[um] vs[que] ad nostora tempora* (1505)の記述はよく知られている。メッケネムの死後2年後に上梓されたこの書の第68章「絵画と彫刻について」*De Pictura et Plastica*では、メッケネムの名前がまず挙げられ、続いてションガウワー、デューラーについて記されている。メッケネムについては、「イスラエルの絵[版画]は、ヨーロッパ中から求められ、画家から非常に高く評価されている」とある。メッケネムの作品がヨーロッパ中に広まっていたことはこの記述から立証され、またむしろションガウワーやデューラーの記述の方が多いとはいえ、筆頭に掲げられていることは、この版画家がより古い作家であると認識されていることを示すのだろう。

同年に書かれたラーハの修道士ヨハネス・ブツバッハ Johannes Butzbach

(1478-1516)の手稿「優れた画家たちについての書簡」*Libellus de praeclaris picturae professoribus*(1505)は、当時の修道院内で書かれたものとしては珍しい美術についての著述であり、内容は、大きく三つに分かれ、最初にプリニウスに依拠した古代の美術、次にキリスト教美術、最後に短く近代の美術が述べられている。最後の部分で「版画芸術では、ポッホルトの市民イスラエルがとりわけ称賛されている」とある。ここでは、版画と明示されていることが注目される。また、この書簡ではその他の芸術家としては、近代の最初にジョットの名が挙げられているほかは修道士たちのことしか触れられていないのである。つまりここでは、イスラエル・ファン・メッケネムひとりが版画家としてとくに取り上げられ、きわめて強調されているとみられることである。

版画のコレクション目録も重要な記録となる。スイスのパーゼルには、この時代の重要なコレクションであるアマーバハ家のそれがある。美術史上でアマーバハと言えば、ハンス・ホルバイン(子) Hans Hollbein (the younger) が人文主義者で法律家のボニファキウス・アマーバハ Bonifacius Amerbach (1495-1562)を描いた肖像画(パーゼル美術館蔵)が想起されるだろう。ボニファキウスはコインやメダルを収集していたものの、美術をとくに愛好したわけではなかった Amerbach-kabinett と呼ばれる豊かなコレクションは主に彼の息子である法律家バシリウス Basilius (1533-1591)によって築かれた。現在でもパーゼルの美術館や聖堂でそのコレクションの多くを目にすることが出来る。コレクション目録は現在パーゼル美術館の版画素描室に所蔵されている。筆者は現地で調査を行い実物も閲覧したが、経年による劣化で直接手に触れることはできない状態である。幸い目録の内容はすべて書き起こしが行われている。目録の書式はそれぞれに異なり、多くの品目の中に版画も含まれ、まとまって記されている。もっとも早い1577年から1578年の目録Aには、Israhel Mの版画が1点記されている。1580年から1581年の目録Bには、作家名だけが記され、Israhel v Mechelenとなっている。1587年から1588年の目録Dでは、IMが5点と記されている。

17世紀に入ると、マティアス・クアト・フォン・キンケルバッハ Matthias Quad von Kinckelbach (1557-1613)の『ドイツ国の栄光』*Teutscher Nation Herligkeit* (Köln, 1609)の「ドイツ国の著名な芸術家、とくに画家および版画家」*Von den berrumbten kunstnern sonderlich aber Maelern und Kupfferschneidern Teutscher Nation*にメッケネムの記述が見られる。この著作の内容については、後の版画史の章で詳しく述べることにし、ここではメッケネムにかんすることだけに触れておく。クアトはF・フォン・

ポッホルト F. von Bochlt をもっとも古い版画家とし、アイフェル(ライン川左岸の高原山脈地方)出身の Israhel von Meckenich [イスラエル・ファン・メッケネム]はまっすぐに彼にしたがったと記している。該当箇所の記事は、モノグラミストと一緒に書かれているので、後に詳しく述べる。

17世紀の版画コレクション目録としては、ベルリン国立美術館版画素描館に所蔵されるニュルンベルクの商人で富裕市民であったパウル・ベハイム Paul III. Behaim (1557-1621)のものがある。彼がこの目録を書き始めたのは1618年である。ここでは、F: M: として4点の作品の主題が記されている。

そして、ヨアヒム・フォン・ザントラルトの『ドイツのアカデミー』である。ザントラルトは、メッケネムをこれまでの著者と同様にショーンガウワーよりも古い版画家と位置づけ、イスラエル・ファン・メッケネムの I. V. M. の文字を、Israel von Mecheln、Mechen あるいは Mainz であるかもしれない、としている。そしてザントラルトは彼を最初の、あるいは最初の版画家のひとりとなした。

(4)モノグラミストたち

モノグラミストとは、版画に残された文字で呼ばれる逸名の版画家たちである。すでに述べたように、はじめて版画にイニシアルと思われる E と S の文字を刻み込んだのが、その名でマイスター E.S. と呼ばれる版画家である。そのいくつかは年記があり、1467年をもっとも遅いであるため、その年または翌年に没したと考えられている。マイスター E.S. に帰される作品は、宗教主題、世俗主題、装飾、カルタ札などそれまでになく多岐にわたり、300点以上残るその作品数も他のモノグラミストに比べて群を抜いて多い。マイスター E.S. は最初期のもっとも重要な版画家とされている。主題の多様性という点では、イスラエル・ファン・メッケネムの作品にも同様の傾向が見られ、メッケネムはマイスター E.S. の作品を模倣し、さらに原版を譲り受けただけでなく、その手法そのものに倣ったといえる。しかしより合理的に大量生産したメッケネムに対して、マイスター E.S. の作品は現存数が非常に少なく、希少であったと思われる。

古いコレクションにおける所蔵記録としては、アマーバハの目録 B に A.G. fort G. 1466. の、目録 D に G. A. °. 1466. 1 の記載がある。これは、E の文字を G と読み違えたものと考えられ、現在バーゼル美術館版画素描室に所蔵されている《アインジーデルンの聖母(大)》(Inv. B1/4) がそれに相当すると考えられている。《アインジーデルンの聖母》(L.68, 72, 81)は、スイスのアインジーデルンのベネディクト派修道院で起こった奇跡が966年に教皇レオ8世から認められた年か

ら500年にあたる1466年に、大々的に行われた記念祭に際して巡礼記念として三種類の大きさで制作されたものである。該当する作品はもっとも大きなものでEの文字と1466年の年記が入っている。

次に、前章で触れたマティアス・クアトがもっとも古い版画家として挙げていた F. von Bocholt である。クラマーとクレムの注釈では、ポッホルトの地名がでていることから、これもイスラエル・ファン・メッケネムとしている。しかし、パウル・ベハイムの目録では、FVB を Franz von Bocholt として12点の作品を記している。また、アマーバハの目録 B に記載の F. V. B は、書き起こしの注釈で16世紀後半にブリュージュで活躍した Hans Frank と同定されている。ただし、古い文献では常にポッホルトのイスラエルがもっとも古い版画家として以前に言及されていることから、クアトが混同した可能性も否定できない。

クアトは、イスラエル・ファン・メッケネムとともに、W の文字 litter W について記述している。先の F. von Bocholt のところから該当箇所を以下に試訳した。

最初の、もっとも古い版画家について、私が聞き知るのは、F・ファン・ポッホルトである。彼は南ネーデルラントで制作していたようだ。そして、このマイスターのいかなる古い刷りも見いだせない。その作品は、恩寵を賜っているにもかかわらず、去りゆく精霊よりも自然にもとづき作り出されている。彼の後をアイフェルに住むイスラエル・フォン・メッケニヒと W の文字はまっすぐににしたがった。その文字の意味を私は未だ知らない。両者はその作品がいささか劣るが、多くは非常に大型で不思議なものに至るまで巧みに[銅]板に彫った。それらはまた、ポッホルトの様式の名残を多く示している。

ザントラルトもまた、W の文字が記された版画のことに言及している。彼が述べている「聖母マリアと聖ヨハネがいるエック・ホモ」は、おそらくヴェンツェル・フォン・オルミュツ Wenzel von Olmütz (1481年頃から1500年頃に活躍)によるショーンガウワーの《マリアとヨハネをともなう悲しみの人としてのキリスト》の模作(L.21)であると考えられる。ウィーンのアルベルティーナ版画素描館に所蔵される刷りには、16世紀に書かれたと考えられる次のような記述が画面内に残されている。「この銅版画はヴェンツェルという名の金銀細工師によって作られた」初期版画に残るたいへん珍しい記述である。この版画家自身が刻んだ名前は、ショーンガウワーの《聖母の死》の模作(L.11)画面下に“1481 WENCESLAVS DE OLOMVCZ IBIDEM”として残されている。

ザントラルトは、イスラエル・ファン・メッケネムの出身地の推定を行っているのと同時に、モノグラミストの名前も解読している。たとえば M.Z. の名を Matheus Zing あるいは Zatzinger としているが、同じ文字をペハイムも Matheus Zingel あるいは Zarzinger としている。これは現在 1500 年頃から 1503 年頃に活躍した Matthäus Zasinger ではないかとされている。

その他にザントラルトがあげているモノグラミストを挙げておく。彼は A.G. を Albrecht Glockenthon としており、ペハイムの目録にも、Georg Albrecht Glockendon とでている。グロッケンドン一族は、代々彩飾「画家として活躍し、後には出版業も手がけた。版画を制作したかどうかはさだかではない。ザントラルトの述べている 12 点の受難伝は、おそらくマイスター AG の作品 (L.6-17) を指している。マイスター AG の受難伝は、ショーンガウワーのそれとの関係が指摘されながらも、かなり自由に画面に構成しているばかりか、《最後の晚餐》(L.6) や《エルサレム入場》(L.7) という新たな場面を付け加えている。《ゲッセマネの祈り》(L.8) では、デューラーの木版大受難伝の同主題は、ショーンガウワーの作品よりも、むしろマイスター AG の作品により近い。マイスター AG の作品は広く知られていたため、デューラーがマイスター AG の受難伝連作を知っていた可能性は十分ある。この連作には、17 世紀に彫り直されて別のモノグラムが加えられた第二、第三ステートが存在する。この事実は、その版が長く使われ続けていたことの証左となる。ショーンガウワーの受難伝には、ヴェンツェル・フォン・オルミュッツをはじめとして多くの模作があるものの、マイスター AG のそれは創造的な模倣という当時の制作形態を示す興味深い例だといえるだろう。

ザントラルトが Barthel Schön とした B.S. は現在マイスター-bxg とされており、G を S と誤読したのだとされている。Bartholomeus Gobel とする説もある。

ザントラルトが記した HS のモノグラミストは、1500 年頃ニュルンベルクで活躍した版画家と考えられるが、現存作例とは記述が一致しない。

16、17 世紀のドイツでは、イスラエル・ファン・メッケネムの他にもショーンガウワーよりも早いモノグラミストたちがいたことが認識されていた。マイスター-E.S. の E の文字が誤読されていたように、とくに初期版画については、それを手にとった後の人々はその解読に苦勞していたようである。17 世紀のクワト、ペハイム、ザントラルトの記述に見られるように、この時代にはモノグラミストの名前がある程度知られていたことがわかる。

(4) 版画史

ザントラルトは、すでに述べたように、も

っとも早く名前の知られる版画家であるメッケネム伝において、主に彼の版画論を展開した。ザントラルトは、ヴァザーリがマルカントニオ伝において最初の版画史を記した内容に対して異を唱えた。ヴァザーリは、版画芸術の発明という榮譽はすべてイタリア人のものとしたからである。このヴァザーリの主張に対して反論を行ったのは、実はザントラルトがはじめてではなかった。

ザントラルトよりも約百年前、すでに著述家ヨハン・フィシャルト Johann Fischart (1546/7-91) が、歴史家オノフリオ・パンヴィニオ Onofrio Panvinio (Onuphrius Panvinus 1529-68) の『諸教皇の正確なる肖像』ACCVRATAE EFFIGIES PONTIFICVM MAXIMORVM (Straßburg, 1573) のドイツ語訳に伏した序文の中で、ヴァザーリへの反論を行っている。ここでは、ヴァザーリがこの技の発明者としたマーズ・フィニグエッラ Maso Finiguerra を 1470 年頃に活躍したとし、それよりも早くマルティン・ショーンガウワー Martin Schön の師 Luprecht Rüst が 1430 年に活躍していたとしている。また、1458 年にシュトラスブルクとマインツ Mentz で書籍出版が始まったことに先駆けて木版画は起こっていると、さらにエングレーヴィングやエッチングに勝ると主張している。記述は短いものの、ザントラルトとほぼ同じ論法でヴァザーリの説を反論している記述が、ヴァザーリの著作のわずか 5 年後に書かれていたことは注目すべきであろう。

最後にとりあげるのは、先に触れた 1609 年のマティアス・クワトによる『ドイツ王国の栄光』中の「ドイツの著名な芸術家たち、とくに画家と版画家」である。オットー・ペルカによれば、これは「ドイツにおける最初の版画史」であり、その主な内容は以下の通りである。

序文 (金工からの銅版画の成立)

A) 銅版画の歴史

銅版画の始まり。F von Bochlt、Israhel van Meckenich [イスラエル・ファン・メッケネム]、litter W [ヴェンツェル・フォン・オルミュッツ]、Martin Stock [ショーンガウワー]

デューラー、Lucas von Leyden [リューカス・ファン・レイデン]

クライン・マイスター、デューラーの追隨者

高、低ドイツの初期ルネサンス

16 世紀末のネーデルラントのカルタ札のマイスターと挿絵家

ネーデルラントの絵画と銅版画、物故、現存のマイスター

B) 建築家、彫刻家、金工家、メダル作家らをまとめた記述

クワトは、自ら版画家であり、地誌学者、

地図制作者、出版者、著述家として幅広く活躍した。プファルツ侯カール五世に献呈されたこの書はドイツ国の歴史的地誌書である。芸術についての記述は短いものの、さまざまな芸術家に言及しながら、半分以上が版画に当てられているということは、クワドの関心を示すものであるとしても、注目すべきことである。たとえば、ションガウワーについては、「版画家のほか、素描家、画家でもあった」として、明らかに版画に重点を置いていることがわかる。版画は、ドイツの発明として特徴的だと見做されているのである。

(5) 結論

16世紀からザントラルトに至るまでの初期版画についての記述を、作品と照らし合わせながら考察してきた。ザントラルトは、ヴァザリやファン・マンデルに倣って、総括的な美術理論書を著わしたとはいえず、すでに16世紀からドイツにおいて美術を語る際に、版画について多くの言及がなされてきたことが確認できた。本研究により、16、17世紀のドイツ語圏の文献では、デューラーという大芸術家の存在のみならず、それ以前の版画家や版画の歴史にも早くから関心が向けられてきたことを明らかにすることができた。印刷術、そして版画芸術は、ドイツ人にとって自国の特色ある芸術として多いなる関心と誇りをもって認識されてきたと言えるのである。

上記の成果をまとめた報告書を刊行した。その内容は以下の通りである。

- ・ドイツ語圏 16、17世紀文献における初期版画
- ・ヨアヒム・フォン・ザントラルトの『ドイツのアカデミー』にみる「版画の起源」
- ・翻訳
 - 「ボローニャの銅版画家マルカントニオ」冒頭部分(ヨアヒム・フォン・ザントラルト『ドイツのアカデミー』1675年より)第2部第2書「イタリアの芸術家」第23章
 - 「イスラエル・フォン・メツヒェルン」(ヨアヒム・フォン・ザントラルト『ドイツのアカデミー』1675年より)第2部第3書「ネーデルラントおよびドイツの芸術家」第2章X
 - 「直彫法と腐蝕法について」(ヨアヒム・フォン・ザントラルト『ドイツのアカデミー』1675年より)第1部第2書「彫刻」第6章

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

保井亜弓、ヨアヒム・フォン・ザントラルト『ドイツのアカデミー』にみる「版画の起

源」、金沢美術工芸大学紀要、59号、2015、53 - 60

〔学会発表〕(計1件)

Ayumi Yasui, Where has Paris gone? Sebald Beham's Fountain of Youth reconsidered, Kyoto, Art History Colloquium: Sacred and Profane in Early Modern Art, Kyoto University, 2014/10/4

〔図書〕(計4件)

保井亜弓、金沢芸術学研究会、ドイツ語圏16、17世紀文献にみる西洋初期版画、2015、30

保井亜弓他、国立西洋美術館、ジャック・カロ：リアリズムと奇想の劇場、2014、27-31、206-209

保井亜弓他、ありな書房、版画の写像学、2013、61-102

保井亜弓他、西洋近世版画史の一次資料調査(科研報告書)、2013、27-33

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

とくになし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

保井亜弓 (YASUI Ayumi)
金沢美術工芸大学 美術工芸学部 教授
研究者番号：30275086